令和３年度　第１回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会　会議録

日　時：令和３年６月２４日（木）18：00～19：30
会　場：練馬区立区民・産業プラザ　研修室１

１．事務局長挨拶

コロナ禍においてまん延防止措置が続いている中、本日は時間を早めての開催となった。各チームの取り組みの報告させていただいた後、委員の皆様にはいつも通り忌憚のない意見を頂ければと思っている。

２．配布資料確認

３．新任委員への委嘱状交付

４．練馬区地域福祉計画進捗状況報告

委 員 長：計画も２年目に入ったが、コロナ禍で思い通りにいかないこともあると思う。今日は各チームの進捗状況を聞きながら取り組みを一緒に考えていきたい。

委　　員：社協の計画と連携して進めている。ここでは社協との関係が深いものを説明する。
４ページの施策１「区民との協働と地域の支え合いを推進する」だが、社協に地域福祉コーディネーターを配置し地域支援ネットワークの構築を進め、ネリーズ、キーパーソンとともに地域づくりを進めるとある。具体的にはネリーズの登録者の目標を令和６年度に７３０名としている。昨年度６７８名となり着実に増えている。５ページの施策２「福祉サービスを利用しやすい環境をつくる」だが、この中に生活困窮世帯への自立支援の取り組みがある。コロナウイルス感染症が拡大する中、昨年度生活相談コールセンターを開設し、社協と連携し住居確保給付金や特例貸付等の相談対応を行った。また、令和２年度に生活サポートセンターを区役所内に移設した。生活サポートセンターでは17,000件を超える相談があり、令和元年度の１．５倍となっている。７月から生活困窮者自立支援金が始まるがこちらは区で対応する予定である。取り組み項目３で災害時の要支援者の対応とあるが、災害ボランティアセンター運営を協力して行う。昨年度は災害ボランティアセンター立ち上げ訓練、災害ボランティアコーディネーター入門講座、災害シンポジウム等を実施した。８ページ「権利擁護が必要な方への支援体制を整備する」は、主に社協の権利擁護センターの取り組みとなる。成年後見制度推進の中核機関と位置づけ、身近な地域で関係者が連携できるようにネットワークを構築している。また、検討支援会議を昨年度９回開催し顔の見える関係づくりを推進している。権利擁護センターの相談数は昨年度10,605件から14,000件以上に増加している。潜在的なニーズもあると考えられるが、新しいパンフレット等の作成や区報などで周知啓発をしてきたこともある。また、社協には法人後見や権利擁護事業などに取り組んでいただいている。新型コロナウイルスの影響で計画どおり進まず、事業の見直しが必要になるかもしれないが創意工夫しながら取り組んでいきたい。

委　　員：５ページの取り組み項目１のコーディネーターの配置についてだが現在どのような状況なのか?

委　　員：複合的な課題への対応は、それぞれの窓口で対応している。調整は練馬総合福祉事務所にコーディネーターを配置し進めている。

委　　員：今後この取り組みを進めていくうえで地域福祉コーディネーターとの関わりも出てくると思う。

５．第５次地域福祉活動計画の取り組み状況について（資料1）

委 員 長：これから活動計画の取り組み状況を報告してもらう。

①ネリーズ通信…ネリーズ通信 19 号を配っている。裏面のほっこりエピソードを今後も載せて皆さんに知っていただきたい。ネリーズの紹介では次回は石神井地区の方を予定している。ネリーズかるた紹介では次回委員にお願いする。

②懇談会…６月 29 日に懇談会を開催する予定である。現在 10 名の参加申し込みがある。６月４日に Zoom の使い方を学ぶ「オンライン勉強会」を開催している。今回の参加予定者には勉強会参加者の方もいる。懇談会では「コロナ後の活動」や「新しい日常」、「ほっこりエピソード」等を話してもらい皆で共有したいと思う。勉強会に参加いただいた委員に感想をお願いしたい。

委　　員：Zoom の使い方は若い方ならすぐ覚えられるのだろうが、自分も含めて、覚えるのには時間がかかる。驚いたのは 90 代の方がとても熱心に覚えようとしていたこと。前の懇談会の時感じたのは、皆さんやはり人と話したいのだなということ、地域の中で核となっている方の参加も多く、自分がやらなくてはと思っている方も多く、このような取り組みは必要なことだと改めて思った。

③ホームページ…既存のツールを使い周知を広げていく。方法の１つとして動画を作成した。約１分の動画を３つ作ったので本日視聴していただく。（動画再生）

委 員 長：字幕が早すぎて読めなかったのでもう少しゆっくりしたらどうか。

④キーパーソン…本日配布した参考資料「ネリーズ・キーパーソン・地域福祉コーディネーターの機能」について説明。最初に機能について図を使って説明し事例を重ねて説明した後まとめをしたいと思う。

丸３つでそれぞれの機能を表したが、２つの丸が重なった「エンパワーメント」と「地域密着」となっている。（図について機能については資料参照）事例の紹介（①は分析を使った事例②はリフレーミングを使った事例）

①事例　施設の利用者のＡさんが亡くなる。生前大切にしていた琴をその施設に置いておくことができないため、共感した、つまり突き動かされた施設職員のＢさんがコーナーの職員に相談。そしてＢさんの気持ちをくんで協働しながら、Ｂさんの突き動かされた気持ちを大事にして高めた。結果最初は遠方まで琴を持っていくことに対して消極的だったＢさんは積極的に他区の学校まで届けることができた。

①リフレーミングの事例　しらゆりの水の事例。水へのこだわりが、加湿器や植木の水やりに転化したことで、周りに褒められる行為になった。

まとめ

①それぞれの役割には独自の部分と共通の部分があるのではないか。

②事例は視点を変えることによってさまざまな解釈ができる（リフレーミング）

③事例の積み重ねによりそれぞれの機能がより明確化されていく可能性がある。

④突き動かされる対象は人だけでないのではないか（出来事や、経験、物など）つまり場面（ネリーズ懇談会）が大切である。

委　　員：福祉作業所の事例などでわかりやすかった。説明するには努力が必要だったと思う。ねぎらいたい。

委　　員：図の中のカタカナ、特にリフレーミングとエンパワーメントという言葉は変えたほうが良い。エンパワーメントはもともと行動的にパワーを奪われた人が自分の権限をどう使うかということなので、今使ったようなパワーを引き出すということとは少しニュアンスが違うように思える。誤解を与えないように違う言葉にしたほうが良いと思う。

委　　員：相手がわかる言葉でないと伝わらないと思うので、誰でもわかる言葉で説明したほうが良い。

副委員長：琴の事例について、利用者Ａさんはとても琴を大事にしていた。亡くなった後持ち物を処分しなければならなくなったとき、ＢさんがＡさんの気持ちに何か突き動かされるものを感じ行動した。キーパーソンというのは突き動かされるという要素が重要だと思う。ＢさんがＶＣに相談しその

思いにまた突き動かされてと続いていくが、その突き動かされる気持ちがどんどん波及していくというのが事例を聞いていて大変面白かった。

委 員 長：次に第５次地域福祉活動計画の評価について説明をお願いする。

職　　員：評価についての進め方、視点をまとめた資料２－１に沿って説明。
点線で囲んだ部分は評価の視点として、評価を進めていく。
取り組みについては資料２－２「取り組み報告書」を使って取り組みを蓄積して評価の参考にしていく。　　資料３は活動計画に書かれている取り組み目標に、令和２年度の各部署等の取り組みと成果を書いたものになる。実施したものだけでなく実施してどのような変化があったかを書くようにした。字が小さく申し訳ないがお目通しいただきたい。コロナによって見えてきた地域の課題と見えづらくなった課題とがある。それを踏まえ何を目標にして、何に取り組んでいくか考えていく。また、一人一人の価値観をどう受け止めてどう変えていくかが大切と思う。外に向けてどう見えるようにしていくか、どう広げていくかを考えながら評価をしていきたいと思う。

委　　員：評価の軸や基本的な考え方についてまだ悩んでいる。色々なエピソードや実施事業ついての積み重ねは大事だと思うが、これをどう評価するかとなると難しいところがある。一人一人の価値観の違いを踏まえてどう活動していけばよいのか悩むところ。一つ一つの活動がどうなのかではなくその人にとってどのような意味があるのかを考える必要がある。一つ一つのエピソードはとても良いものだと思うが、人の意識や住民の意識を変えていくにはどうしたらよいか。先ほどのキーパーソンの説明の中で丸が重なる部分の「感性」とあったが、この部分をもう少し具体的に表せれば､評価につながるかは別として､やっていることの意味は分かりやすくなるのではないか。数字で表せるところはそれでいいが、そうでないところをどう評価するか悩むところ、評価委員会の中でもう少し深められればと思う。

委　　員：他の委員の方が「一つ一つの活動がどのような意味があるのか」とさりげなく言うが、とても良いことを言っている。エピソードをもっともっと積み重ねていき、それをもっと出していくことが評価につながっていくのではと思う。「一人の不幸も見逃さない」という理念をたて、第３次、第４次とできたことを積み重ね第５次で何ができるのかということと、住民にもっとネリーズを知ってもらうことが評価につながるのかなと思う。琴の事例でネリーズが出てこないで、キーパーソンと福祉コーディネーターの関係で進んでいるところが興味深い。先ほどのキーパーソンの図でエンパワーメントが地域福祉コーディネーターからネリーズとキーパーソンに伸びているが、自分の感覚では共感そのものがネリーズや周りに伝わって､ネリーズの意識が大きくなるという、共感からネリーズへ向かっているイメージ。キーパーソンや地域福祉コーディネーターの周りで起きた出来事が共感という形でネリーズに伝わっていくことによってネリーズの力が高まっていくというようなことが共感ということの意味かなと思う。地域福祉コーディネーターが共感したエネルギーで自分の力を引き出していく、そういった意味で出てきた事例をどういった視点で可視化いくかが大事だと思う。

委　　員：社会福祉協議会の活動を評価していくことはとても難しいと思う。一般的に評価というとビフォーアフターということだが、質の評価や活動の評価は数とかでない。相談からどれだけ関わって相手の思いをどう受け止めたか、どう解決していったかということを、どのような物差しで測っていくかだと思うが、むずかしい。計画の評価をどうステップを踏んで積み重ねていくかが次の計画に行くというプロセスになる。結論を急がずにどれだけの人とそのような話ができたか、お互いに討論ができたかが社協の力になると思う。

委　　員：第４次計画と第５次計画とどこが変わったかというとコロナだと思う。このような状況は悲劇ではあるが、逆に活動計画の取り組みが生きるということだと思う。結果はすぐには出ず、後にな

って出るものである。皆さんは最善を尽くして取り組んでくれればよい。評価は自分の中ですれば十分だと思う。

委　　員：計画相談の仕事している。コロナの影響で１人暮らしの障害を持った人の生活が困難というか社会とのつながりが希薄になっているように感じる。既存の福祉サービスでは解決できない状況である。ヘルパーや日中活動など以外の生活がもっと充実しないかと考える。そこでネリーズとかと結び付けられないかと考えているが難しい状況である。いわゆる感性のサービスでないネリーズという存在をどう必要な人と結びつけるかということをコロナになって強く考えていかねばと思っている。

職　　員：各委員会の資料を配布しているので、お目通しいただきたい。（資料４）

６．　まとめ

副委員長：各チームの進捗を報告してもらったがコロナ禍でもしっかり進んでいると感じた。キーパーソンのところで動画で説明された時、キーパーソンは既に地域に存在するという印象を持ったが、そのようなこともあるが、琴の事例でのＢさんが突き動かされる気持ちを持ったのは琴がキーパーソンではないかとも思えた。突き動かした人・物、動かされた人をセットで考え、ふくらましていくのが大事と思えた。

委 員 長：委員会では今後も各チームの報告や評価を聞いていくと思う。評価は今まで出た話でも難しいものだと思うが、事例を積み重ねていくのが大切なのだと思う。その人にとってどんな意味があるのかという話があったが、主役は住民なので社協がどうこうしたというよりはその人がどう変わっていったのかが重要だと思うので、社協はそれに寄り添うことが必要だと思う。
短時間だったので皆さんの意見が聞けない場面もあり申し訳なかった。本日の会議は終了する。

７．その他

職　　員：しらゆり通信について説明。

８．次回の日程について

日時：令和３年９月 30 日（木）18：00～　を予定